

宗教の中心地としての雲仙：山々の霊性

雲仙の山々は長い間、霊場として崇められてきました。日本でアジア大陸に最も近い場所に位置する九州は、陶器の様式から宗教的な考えまで、海外のモノや思想がもたらされる入口となっていました。仏教は6世紀に日本に伝わり、雲仙地域には僧侶の行基が701年に満明寺を建立した際に持ち込まれました。多くの日本の地域と同様に、仏教の教えや神々はこの地でごく自然に受け入れられ、のちの神道となった土着の自然崇拜ともうまく共存していました。雲仙では仏教寺院のちょうど向かいに神社があるという場所の近さからも、この2つの宗教がいかに近接した存在であるかが見てとれます。

文化の衝突

キリスト教が16世紀半ばに九州に伝播した時も当初は歓迎され、島原半島の高官を含め、すぐに多数の転向者が現れました。しかし仏教とは違い、この信仰との共存は難しく、すぐに対立が日常化しました。キリシタンはしばしば、寺院や神社、石造の天部像など、他宗教で利用される祈りの場や物を冒瀆的と考え、それらを毀損・破壊しました。キリシタン大名の有馬晴信にいたっては、40以上もの大小の神社と寺院の完全破壊を命じています。また、キリスト教に転向した者は西洋の名前を持ち、生活に西洋文化を取り入れるよう促されました。転向者が増えるにつれ、対立も深刻化していったのです。